409. 自動化総合健診における血中ペプシノーゲンの検討

A study of serum pepsinogens in AMHTS

東海大学病院放射線診療センター ○ 皇山 謙二 佐藤 秀二 梅本 亨 宮窪 義和
 K.Hatakeyama S.Satou T.Umemoto Y.Miyakubo
 杉木 義弘 前田 正代 池田 秀 金子 智彦
 Y.Sugiki M.Maeda S.Ikeda T.Kaneko

【目 的】 早期胃癌の発見に有効と言われている血中ペプシノーゲン検査の血中PG1・PG2値を得ることができた。このデータを参考に、直接胃X線検査（胃X線検査）と血中ペプシノーゲン検査（血中PG検査）の比較検討を行った。

【方 法】 胃X線検査を実施した3219名の血中PG値を測定した。このうち胃X線検査の結果、要精検となった402名中当院にて内視鏡検査を行った173名を対象に、胃X線検査と血中PG検査の成績を、内視鏡検査結果と病理診断結果を基に比較した。なお血中PG検査の陽性者とするCUT OFF値はPG1 $\leq$ 70.0及びPG1/PG2 $\leq$ 3.0とした。

【結 果】 同じ対象群に対して、胃X線検査の要精検者は402名、血中PG検査では1093名あり、要精検率は血中PG検査の方が胃X線検査に比べ約3倍と高値となった（Fig.1）。また血中PG検査は5.0歳以上の陽性率が特に高値となる（Fig.2）。内視鏡検査・病理診断結果との比較は、潰瘍及び潰瘍瘢痕・ポリープでは、胃X線検査の精度が高いが、胃炎については血中PG検査の方が高くなっている（Fig.3）。さらに胃炎の中でも萎縮を伴った胃炎に限るとその的中率は約80%近くにもなる。癌症例については、胃X線検査及び血中PG検査での指摘は1名、胃X線検査のみの指摘は1名、血中PG検査のみの指摘は1名の合計3名であった（Table.1）。

【考 察】 血中PG検査は、PG1・PG2値をそれぞれ微量の血清で測定することで慢性萎縮性胃炎をスクリーニングするものなので大量処理が可能であり、胃X線検査に比べ苦痛が少ないなどの利点がある。しかし、今後使用するにあたり次の問題点を検討しなければならないと思われる。

1. 胃X線検査に比べ陽性率が高く、さらに50歳代以上になるとその傾向は強くなる。
 2. 一度陽性となると次回以降も陽性となる確率が高い。
 3. 胃の手術をした人は、PG値が低値となり陽性者となる。
- したがって現時点で血中PG検査は胃X線検査に置きかわることのできる検査ではないと判断する。

Fig.1 陽性者数の比較

Fig.2 PG検査の陽性率（年齢別）

Fig.3 各検査の精度比較

	年齢	PG1	PG2	PG1/PG2	PG	胃X線
症例1	54	14.9	10.4	1.4	陽性	要精査
症例2	62	97.2	43.8	2.2	異常なし	要精査
症例3	72	12.1	9.0	1.3	陽性	異常なし

Table 1.胃癌症例